

V 書きやすさを追って、筆記理論からの新しい研究

1. 速記の科学研究 畑田明の符字論

太平洋戦争後、参議院単画符号を開発した元参議院速記者養成所長、畑田明は、速記符号の設計に関して発音速度との関連から、次のように書いている。

速記符号の筆記速度：S 発音速度：P

$$S > P$$

これは、不可能ではないし、別に夢でもない。

畑田は「幾何派の高速度速記法のクライテリア（基準）は1ストローク（画）に2.6音～3.5音をいかにして負荷することができるかどうかというところ」とした。そのカギとなるのは、筆記運動の研究にあり、「速記は求心力（図2-88）で書かれる。求心力をどう活かすかが草書派の実用化の鍵を握っている」と言う。参議院速記者養成所で速記符号の筆記実験を行って、畑田は曲線を連続する場合、小円を挟むほうが単位時間当たりでより多く書けるとデータを示している。視覚的なシンプルさと運動上の筆記性向の間にある速度の心理的な捉え方の誤解を畑田は解いた。

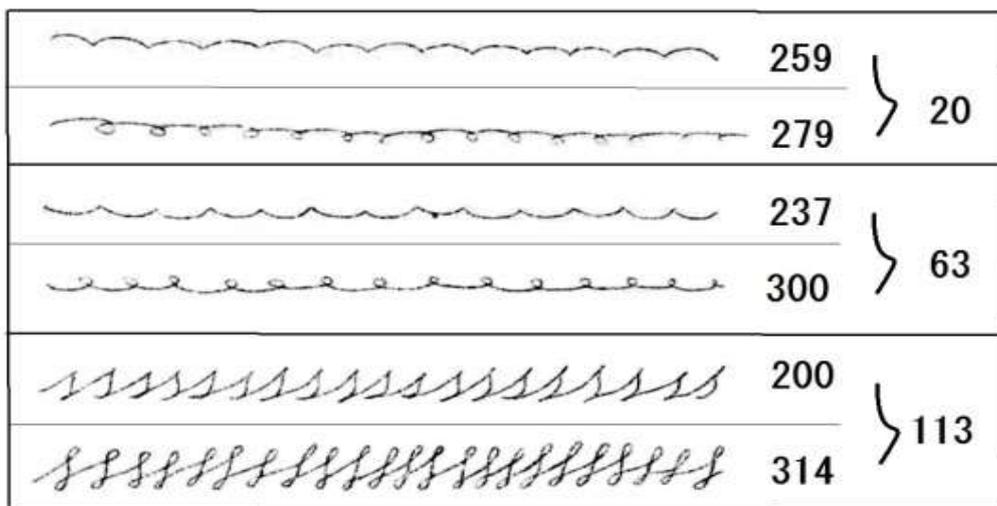


図2-88 回転運動の効用を探究した実験：畑田明「符字論」1952.9.20 p19.

2. 半草書派の登場

英国は、近代速記のほとんどの可能性を生み出し、成長させた苗代であった。ローマのタキグラフィの復活、幾何派の創造、そしてボードリー Simon Bordley による草書派の発芽が英国において見られた。

草書派はドイツに渡って筆記体派として完成され、幾何派で加点母音を主流に大陸へ広がる流れがフランスへ渡ると母音を円やフックなどのサインで表すフランス流派の発展をもたらした。図2-89は草書派が求める美しい筆記体の綴りである。



図2-89 ガベルスベルガーの美しい早書き書体

3. グレッグ式の影響～ 酒井式, タクマ式, 日本グレッグ式

グレッグ John Robert Gregg は ellipse(幾何楕円)を基礎アルファベットに用いたとしたため楕円派と呼ばれてきたが、グレッグ式ではラテンアルファベットの筆記体の要素を用いており、ドイツでは幾何派と草書派の折衷理論であるとして半草書派と呼ぶことから、ここでは半草書派とする。

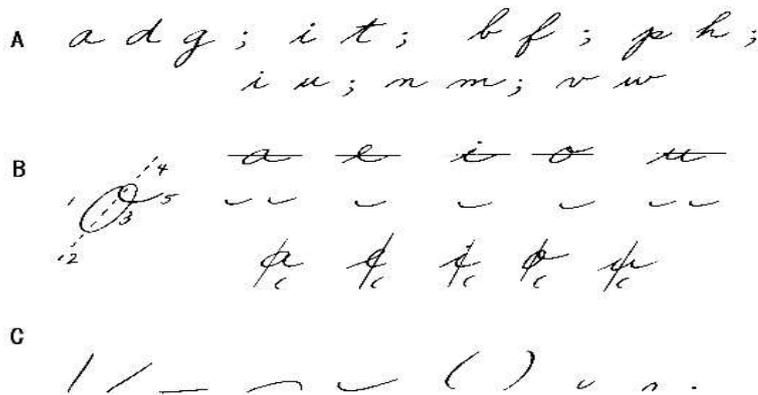


図2-90 グレッグ式の筆記体要素からの符号生成法

英国でテーラー式など幾つかの速記方式を学んだグレッグは、わずか 13 歳で新方式理論の立案を目指し、筆記体の動作原理に基づくドイツのシュトルツェーシュライ式の動態符号に共鳴し、またフランス語系スローン・デュプロワエ式英文速記法を参考にして連綴母音を導入して、速記史家アンダーソンが示した理想の速記方式の開発に着手した。第一の課題は、時代が文字式から符号式への発展期にあつて、ピットマンによって表音主義が完成される時代であったことから、学習性を改善するため理論の簡潔に力を注いだ。^{#8}

小池喜三郎は「最新式グレッグ速記法」1956 年 において、「普通の longhand と同じ筆法で書き、総ての運筆方法が通常の handwriting と同一である。普通の handwriting と少し

も変わらず、横に、前へ前へと運筆をなめらかに続けて行けばよいのである。書いたものが実に綺麗にすらすらとしており、従って誰にでも容易に書き易く、なお且つ読み易いように出来ている」と書いた。

グレッグは符号素材をラテンアルファベットの筆記体から要素を取り出して用いた。図 2-90 の A に見られる筆記体の部分がとられ、その要素は B の “Q” の筆記体の部分として説明される。そうして用いられる符号は C にある 10 の要素に限られた。1888 年のアニバーサリー版では二重母音などを書き分けられるように設計されていたが、シンプリファイド版以降では簡略化されていった。

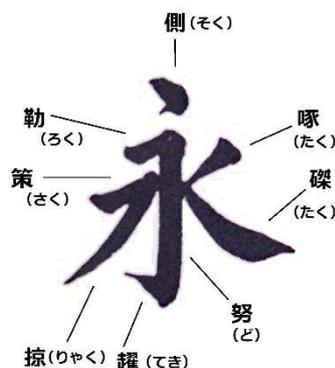


図2-91 永字八法図 漢字百科大事典p48 から

グレッグは、永字八法(図 2-91)のように漢字書法が好む垂直、右下方向の線を避け、濃線をも避けた。右下方向線を除いてクロス式と同様の線嗜好はラテン文字のものであった。書きやすい角度、方向の一部に 3 種の線長を採用し、また、図 2-92 のように、母音を表記するためフランス方式の円や半円 (フック) のサインを取り入れた。

ä	{	fāt	o	u	{	bułł	o
ā	{	fār	o	ō	{	möve	o
a	{	fall	o	i	{	it	u
ö	{	nöt	o	ē	{	mēt	u
ō	{	nōte	o	ā	{	fāte	u
ü	{	nüt	o	ē	{	mē	u

図2-92スローン-デュプロワエ式の母音(1)
The Sloan-Duployan Phonographic Instru-
-ctor 1913, James Matthew Sloan. p6

逐語高速度型のピットマン式が、理論が難解で習得することが困難であったのに比べて、グレッグ式速記法は学びやすく設計されたので、ビジネスレーターの口述用に、秘書技能として全世界に普及していった。初版に続くシンプリファイド版は、省画化のための語末の分離記法 Disjoined を最低限の用法だけ残して廃止され、また略語 Brief Forms を 319 語から 184 語に減らした。これらの改良を施して、ハイスクールで学習できるように平易になり、秘書型速記の全盛期を招いた。しかし、20 世紀末からの情報通信革命により、速記秘書はアドミニストレーターにとって代わられ、ほぼ消滅した。

	A I U E O	KA KI KU KE KO	SA SHI SU SE SO
グレッグ式 1929	○ ○ 〃 ？ 〃	K —	S (or)
	ア イ ウ エ オ	カ キ ク ケ コ	サ シ ス セ ソ
酒井式 1933	○ ○ 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃
日本グレッグ 1937	○ ○ 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃
タクマ式 1938	○ ○ 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃 or or or or or

	TA CHI TSU TE TO	NA NI NU NE NO	HA HI FU HE HO
グレッグ式 1929	T —	N —	H —
	タ チ ツ テ ト	ナ ニ ヌ ネ ノ	ハ ヒ フ ヘ ホ
酒井式 1933	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃
日本グレッグ 1937	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃
タクマ式 1938	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃

	MA MI MU ME MO	YA YU YO	RA RI RU RE RO	WA
グレッグ式 1929	M —		R —	
	マ ミ ム メ モ	ヤ ユ ヨ	ラ リ ル レ ロ	ワ
酒井式 1933	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	〃
日本グレッグ 1937	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	
タクマ式 1938	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	〃 or

図2-93 グレッグ式系統の日本語速記方式と基礎符号 兼子次生作成

歴史的に見ると、綴り字改革を目指して厳格な表音主義を追うピットマン、学習しやすいグレッグの書線、高度な筆記理論を持つクロス式が日本の速記符号研究者に影響を与えてきた。またドイツの速記理論は筆記ゾーンの用い方などで示唆を与えるものであった。

速記符号は「音声言語を文字に転換するための単なる道具としての中間メディアだ」とする考え方と、ピットマン式のように「速記は文字と同様に表音記号の一つであって、音声を正確に固定する中間メディアである」という考え方が存在してきた。中国、蔡錫勇の傳音快字は掃除文盲を目的とする新文字を目指して創案されており、文字改革の流れの中で機能性文字として速記は多様に展開してきた。

日本においても、符号研究者から人間工学的な視点で新方式が生み出されていく。グレッグ式(図2-93)を日本語に適応させる動きの中で、最初に登場したのは、1932年11月1日発表の酒井伍作による酒井式速記法(図2-93)であった。酒井はのちに相模女子大学で英語

の教員を務めるが、英文速記のグレッグ式を教えながら日本語への応用を研究していた。酒井式速記法の最初の指導は、1932 年秋、東京市社会局大塚市民館主催の速記講習会で行われた。翌年には慶應義塾大学に速記研究会が結成されて、酒井は講師を務めている。流派は折衷派をとり、1936 年には酒井式速記法講義教材を発行するに至っている。

1935 年には、宅間清太郎の和英両用タクマ式速記術(図 2-93)が発表され、アメリカで 1937 年、バーディック P.H. Burdick, 岡村キクエによる「日本グレッグ・ショートハンド」(Nihon Gregg Shorthand(図 2-93) が出版された。

だが、グレッグ式を日本語へ適用するこれらの日本語翻案の試みは成功しなかった。日本では既に幾何派が日本語の複雑な体系に対応しながら専門レベルに達しており、音声言語の多様性に対する経験が十分でない半草書派は地位を築くことができなかった。

4. 母音の新しいあらわし方, V 式の登場

早稲田式を学びながら、小谷征勝は、中根式やグレッグ式, その他の方式を参考にして自然な筆記モーションを研究した成果をもとに、1968 年、同じ母音を持つ基礎符号は同じ角度、筆記方向の線で構成する S V S D (Same Vowel Same Direction) 式を創案した。時代環境として日本語速記法は単画派時代へ

既に入っており、また幾何派理論に対する批判から、人間工学的な画線を志向する流れにあり、それらの枠組みにおいて、小谷式初版では基礎符号には長短 3 種の淡線を用い、純単画式として設計した。このような音節符号の母音を角度で表象する発想は、図 2-94 のミニョン式に見られた。



図 2-94 母音を子音符号の中で表す
Mignon 1874, "Sténographie phonétique"
に見られる同母音同方向の例

出典:A. Navarre, Stenographie, 78p. 1906

S V S D 理論とともに、小谷は類音には類線を用いる原則を確立した。

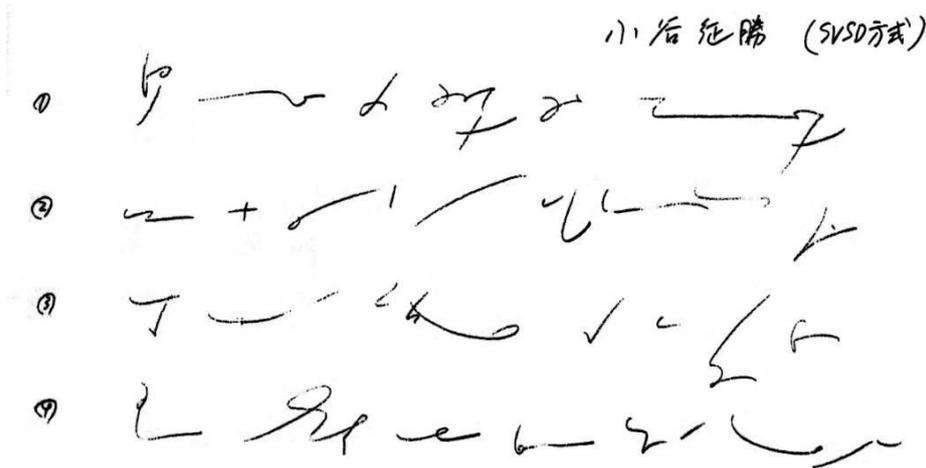
S V S D 式はのちに V 式と名称を変えたが、V 式研究の目標は(1)学習性の改善、(2)書きやすさ、(3)読みやすさ——に置いた。同じ母音を持つ音節は一つの角度方向とする基本原則によると、母音/ア/を持つ音節は右上方向 30 度の向き、/イ/は左下方向 60 度の方向、/オ/は水平 0 度方向、/エ/は垂直 90 度の方向、そして/ウ/は右下方向 30 度方向とされた。図 2-95 は V 式の基礎符号である。

欧州方式では、母音を筆記帯域の高さ位置に応じて表象(シンボライズ)する、つまり目に見える形で表す発想や、子音画線の角度を変えることによって母音を表象する着想があったが、日本語において小谷は実用レベルで初めて母音を方向で暗に示す線表象理論を確立した。

	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ	タチツテト	ナニヌネノ
V式 1975 (SVSD小谷式)	ノノノノノ	ノノノノノ	ノノノノノ	ノノノノノ	ノノノノノ
	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
	ノノノノノ	ノノノノノ	ノノノノノ	ノノノノノ	ノ

図 2-95 V式の基礎符号 小谷征勝 1975

小谷は、日本語の固有の言葉にはア列長音がほとんど存在しないので、それらの符号をア列音+/イ/と読ませることとした。また、字音語末に出現するインツクキ尾音について、ク尾音はア列音、イ列音、ウ列音、オ列音には後に続くが、エ列音には続かないことに着目して、同じ尾音のサイン符号を、先行する母音によって/ク/と/キ/に読み分ける設計とした。例えば/saa/は/sai/と読み、/ak/は/aku/、/sek/は/seki/と読ませる。



- ① 結論的に 申しますと、いわゆる 神らしいといいますが 神戸の 都市容量といいますが、
- ② そういうものを 十分 踏まえて、また 社会経済情勢等の状況も 見ながら、
- ③ ご指摘の ポアイ2期も 含めて、今の そういう 一連の 施設の
- ④ 連携を 図るという形に 今後 検討を 進めてまいりたい、そういうふうを考えております。

図 2-96 SVSD の文例 小谷征勝 V式

小谷は 1968 年「中速度速記法」を公表、翌年には速記技能検定試験 1 級に合格して実用性を証明した。(文例は図 2-96) さらに機能改善を続け、[ア行]と[カ行]の入れかえなどの調整を加えるとともに二線一筆化等を図り、1975 年現在のV式である「日本語速記法SVSD」を著した。1976年「やさしい速記」、1998年「V式でらくらく合格速記入門」、2011年、そして2012年「みんなの速記入門V式」を出版して成果を公にした。

一方、高速度化面では加古修一が新しいアイデアを出し、その評価を検証しながら改善する活動が行われてきた。日本速記協会等の高速度競技会で高速度型の性能を実証するとともに、得た知見をもとに、加古は 1982 年「SVSD 高速度速記法」、続いて 1988 年「SVSD 高速度速記字典」をまとめた。さらに複合語用にワイルドカード(特殊インツクキ)

を加えたり、定義された筆順の逆方向に書く「逆流」,「反転」を採り入れた。類似音類似線の原則を大胆に取り入れ,「ナ行」線を濃線化(濁音の線表象)して「ガ行」線とし,「マ行」線を濃線化して「バ行」線とする方法を符号の反転で実現し,さらに「ラ行」線を濃線化して「ダ行」線とした。また高速で筆記する際の離筆の不利を避けるため,加古は類音類線原則に基づいて,符号末尾を流す箇所を続け書きに変更する「消撥」の書法を採り入れて,結果的に長音と短音を同じ書き方にした。さらに佐竹式の二音文字理論を導入し,同列縮記の運筆形態がよくない「ラ行」,逆長円(楕円),直線に適用し,書きよいものの,使われる頻度の少ない符号形態を拡張活用するなどの経験的な改良を加えている。

研究チームは,早稲田式や佐竹式の運筆法や中根式,石村式など,高速度速記法で得られた経験知を基礎として,合理的な筆記理論を研究した。

5. 一行内に収まる速記法 TIMACE

石村式を独習した岡本隆博は,小谷征勝の発想に刺激されて,1982年TIMACE(タイムース)式(図2-98)を創案した。手書き速記は幾何派,草書派を問わず,符号を連ねていく際,ずりと呼ぶ同じ方向へ書き下がったり,書き上がる現象が生じる。図2-97の例はフランス語の

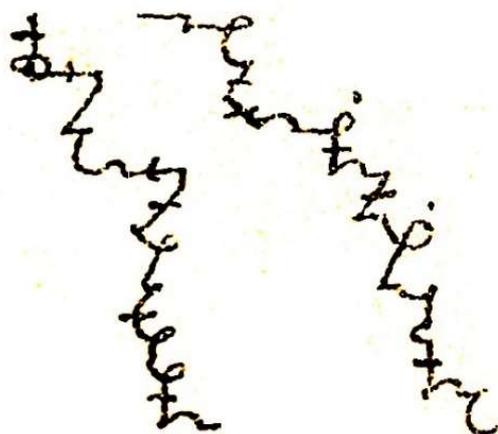


図2-97
幾何派方式に避けられないズリ現象

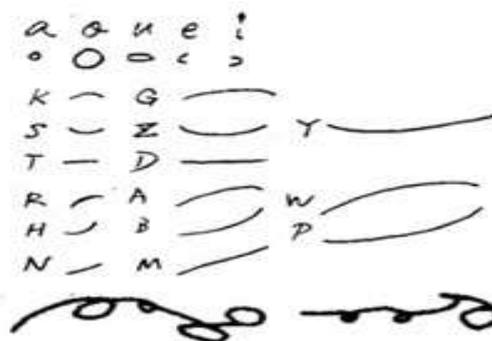


図2-98 TIMACEの基礎符号と連綴例
岡本隆博 1982

ロビー式の例で,縦ずり,横ずりの極端な例だが,複合化して斜めに上下のずりを生じることがある。これは避けるべき筆法とされ,グレッグ式は縦線と右下方向を少なくする配慮を行うなど,各方式とも対策に苦慮している。岡本は,ずりの生じない複画の基礎符号を考案することに着目した。その結果,ノートの罫線を守って書ける速記符号が可能となり,1ページ当たりの符号密度を高めるメリットが実現された。